

に於て少しも差支の生ずる點は無い。此の二字を書くのに、天尊といふ語を書くにも用ひてゐない改行を敢てしたり、或は字間に空白を残してあるのも、此の解釋を道理づける傍證と見て宜からう。さてかく解釋した上で、上に引いた三項の記事について考へて見ると、此の經では天尊と聖上、即ち神と帝王と、及び父母とを恐れ、これに事へて闕くる無からんことを教へ、此の三事は實に一種の事なるを説き、而して帝王に敬事すべき理由を説いては、帝王は前身の福によりて神から其の位に任ぜられたものであるから、實はそれ自體神に外ならぬので、神がたまたま屬帝王と作つて居るものであるとし、また帝王は皆神より生れたものともいふて居るのである。父母に事ふべき理由としては、衆生は父母から生れたもので、父母無ければ何人によつて生れようかと説く外、父母に事ふることが神や帝王に事ふると同一事であるといふ理由については、直接明示してゐないやうであるが、併し「爲此普天在地、並是父母行據此 聖上皆是神生、今生雖有父母見存、衆生有智、計合怕天尊及聖上、并怕父母」といふ一節は脫字も有るやうであり、意味曖昧ながら、或は之を説明するものではないかとも思ふ。さて此の如く神に事へると同様に帝王父母に事へよと説くのは、希臘にも羅馬にも其他東西各地にも存する世俗的の帝王崇拜の觀念とは別なる基督教の教義として果して認められる事であらうか。新約書中にも、權力を掌るものに服すべきことは説かれて居るから羅馬書一〇ノ三 提多書三ノ一等帝王を一個の權を掌るものと見れば、之に服事し敬事することは教義上認められて居ることである。併しながら改めて言ふまでもなく、帝王を以て神より生るゝものとし、神によりて其の位に補任せられたるものとし、更に帝王「自ら乃ち天尊なる無からんや、たまたま屬自から聖上と作る」といひ、之に事ふるを以て神に事ふると同一事であるとする考が、本來此の教義の認むる所とは固より承認し難い。尤も舊約書撒母耳後書七ノ一四には、